
魔法先生リンま！～チートですが何か？～

hayate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生リンま！〜チートですが何か？〜

【Nコード】

N7251N

【作者名】

hayate

【あらすじ】

テンプレな感じでこの世とオサラバしてしまった、高校生・黒桐燐。そんな彼が死後の世界で出会った神様は、燐を暇つぶし目的でネギま！の世界に送る。もはや当然とも呼べるチート能力を手にして、燐はネギまの世界を暴れまわる！……みたいな感じになる予定の物語です。只今、戦争編突入 チートだったり、原作ブレイク（？）になったりします。あと、スロースターターを目指してます

プロローグ（前書き）

というわけで始めました、魔法先生リンま！ タイトルで主人公が後々先生になることがバレバレのタイトルです。そんな作品を読んでくださる方、ありがとうございます！

今までいくつか『小説家になろう』で書かせていただきましたが、なにぶんまだ初心者なので、暖かく見守ってくれと幸いです

それでは、どうぞご覧ください

プロローグ

——運が、悪かったんだと思う。

朝起きて、飯食って、学校行つて、友達とくっちゃべって。
そして、学校からの帰り道。

「……………は？」

唐突だった。あまりにも唐突に、『それ』は起こった。
横断歩道を渡ろうと、足を一步踏み出す。その瞬間、俺の身体は
宙を舞っていた。

意味がわからなかった。わかるのはただ、全身に奔る激痛だけだ。
そして、俺の視界にかすめるものがあつた。フロントガラスにべ
ったりと血がついた、トラックだ。

つまりはまあ——俺は轢かれたらしかつた。

* * *

——???——

「とまあ、シリアスな感じで入ってみたけど、なんなんだろうなこ
の状況？」

トラックに轢かれたはずの俺は、気付けば上も下も右も左もない、
真っ白いヘンテコな空間にぽつんと立っていた。

これはもしかして……あれか？ あれなのか？

「いやいや、さすがにそんなことあるわけ「まあ、実際はアンタの考えてるとおりだったりするわけだけどね」……ですよねえ」

振り返れば、そこには一人の少女の姿があつた。流れるように伸びた赤いロングヘアが、某灼眼のフレイムヘイズを想起させる。

「人をパクリキャラみたいに言わないでくれるかしら……？」

「だって、モロ被りだし。（……もつとも、胸の方は桁違いだけだな！）」

「サラッとセクハラ発言するな」

ゴンッと、彼女は俺の頭を殴った。グーで。

「つてえな！ いいじゃん！ 胸の比較ぐらいしたっていいじゃん！
！ だって俺、高校生だし！」

「いくつだろうが、セクハラはセクハラよ」

こちらら、それなりに健全な年頃の男なんだ。女体の神秘こぼいおに対する興味の度合いなら、日本の経済状況なんかよりも、遥かに高い。
そんな俺の男らしいといえる抗弁に対する彼女の答えは、溜息だった。

「はあ。ホントにこんなんでよかったのかしら……？」

「まあ、いいんじゃない？ それより、俺はどこの世界に行つてチー

トオリ主やればいいんだ？」

「あら？ よくわかったわね」

そりゃあ、この状況じゃあな。なにを隠そう、俺は実はオタクで
転生物の二次創作も、アホほど読んでいたからな！

「じゃあ、アタシの正体もわかったりするのかしら？」

「神様だろ？」

「正解」。どうも改めまして、アタシが神様です！ あ、これ名刺
ね」

差し出された紙を手にとって見てみれば、そこには妙に達筆で『
神』とだけ書かれていた。名刺の意味ねーだろこれ。

「なら、もいつこ質問。アタシがアンタを呼んだ理由はわかる？」

「……暇つぶし？」

「またまた正解」。正解者には、この『神ちやま人形』を贈呈しま
す」

虚空に向かって彼女が手をかざすと、いきなり彼女をデフォルメ
したような人形が現れた。それを彼女はつかみ、こちらに手渡して
くる。

……なんだかなあ。凄いはずなのに、微妙な感じだ。威厳もへっ
たくれもあったものじゃない。

まあ、それはいいとして。

「んで？　なんで選ばれたのが俺なんだ？　やっぱりミスって殺したから、そのお詫びとか？」

「違うわよ、失礼ね。アンタはもともと、トラックに轢かれて死ぬ運命だったのよ。そこをあの世行きではなく、転生させてあげようっていう、粹な計らいなわけ」

「なるほど……」

これは、そんな運命だった不幸を悲しむべきか。それとも、転生できる死後を喜ぶべきか。

……オタクとしては、断然後者だな！

「オーケー、わかった。状況は理解した」

「そ？　なら、さっそく転生の手続きに入りましょう。どこか、行きたい世界とかある？」

行きたい世界か……。

改めてきかれると、悩むな。正直いっぱいあるし……まあ、悩んでもしょうがないか。どうせなら、一番好きなやつにしよう。

「なら、『魔法先生ネギま！』の世界で」

「え？　あんな致死率高そうな世界にするの？」

「そこが、転生の醍醐味だろ。そんな危険な世界で暴れまわるために、チートな能力をもらうんだろっが」

平和な世界でチート能力持っても、全然楽しくない。サザエさんの世界で魔法とか使えて、楽しいか？

「ま、それもそうね。なら、欲しい能力を教えなさい。五つまでなら許すわ」

「うわ、数制限とかどこまでテンプレ。……そうじゃあ、そうだな——」

俺は、とりあえず思いついた能力を告げてみる。

「——ってとこかな」

「ん、了解。あとサービスで、『不老』と『常人の十倍の運動能力』と『大学卒業程度の頭脳』にしてあげるわ」

それもう、サービスの域超えてるだろ。まあ、くれるならもらうんだけどな。

てか、『不老』……？

「なんで、不老不死じゃねえんだ？ そっちのほうで凄いのに」

俺がそう訊くと、彼女はやれやれとでも言うように、首を振った。

「これだから、素人は。あのね、アンタ、不死つてのがどれほど人間の理を外れてるのかわかってる？ そんな存在は、例外なく人外人の身で不死になるうなんて思ったら、これ以上ないってくらいの邪法に手を出すしかないわ。それこそ、エヴァンジェリンが吸血鬼になったみたいな、ね」

「なるほど……。でも、じゃあ不老はいいのか？」

「ギリギリ、ね。そこが人と『それ以外』を隔てる最終ラインと
思っているわ。ま、もっとも普通の人間から見たら、どのみち化け物
でしょうけど」

「あっそ」

別に関係ないね、そんなもん。

「……………さて。こんなもんかしらね。それじゃあ、さっそく出発
してもらっわ」

「え、もう？」

まあ、いいや。

「っしやあ！ そんなじゃあ、一丁行ってみつか！」

「あ、そういえば、いつの時代に飛ばせばいい？」

ん？ それも決めれるのか。

そだなー、じゃあ、せつかくだから、

「エヴァが魔女狩りにあう直前でよろしく」

「オッケー！ しっかり助けなさいよ、オリ主さん！」

そう言っただけで彼女は、パァンと手を鳴らす。すると、俺の足元にぽ
っかりと黒い穴が開いた。

となると、当然俺の身体は落ちていくわけで。そんな中、俺はこんなことを考えていた。

——これから楽しくなりそうだと。

プロローグ（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております

設定（前書き）

いわゆる、主人公設定です。もしかしたら、どんどん変わっていくかもしれません。

設定

名前 黒桐燐 くろぎりりん

年齢 16歳

容姿 身長168cm。体重55kg。ツンツンにたった黒髪。瞳の色も黒。普通にかっこいいが、本人にその気はない。たまに伊達めがね装備。わりとよく似合う。

性格 基本、めんどくさがりや。ただし、面白そうなことには全力。無自覚ながらも、仲間を傷つけられるのを、何より嫌う。後、実は根が熱かったりする。

趣味 料理。模型。読書（ただし、漫画やラノベ）。たまに修行。

好きなもの 動物全般

嫌いなもの つまらない奴。退屈

サービス能力 身体能力は常人の十倍。知力は、大学卒業程度。不老（寿命で死ぬことはないが、心臓を貫かれたりしたら普通に死ぬ）

能力？：全魔法使用可能 現存する、全ての魔法を扱うことができる。また、用途にあった魔法の検索もできる。

能力？：神の左手 ガンダールウ 武器と名のつくものを、手にしただけで使用方法がわかる。加えて、発動中は身体能力向上。『ゼロの使い魔』の主人公、平賀サイトの能力。

能力? : 錬金術 両の手を合わせ、物質に押し当てることで、望んだ形状に作り変えることができる。『鋼の錬金術師』の主人公、エドワード・エルリックの能力。

能力? : ??? ? 封印中

能力? : ??? ? 封印中

新たに得た能力

- ・ 黒桐流柔術 大東流柔術を元に考案
- ・ ナギと同程度の魔力 本来魔力が増えることはないが、何百年にも及ぶ特殊な修行の末にこうなった。

設定（後書き）

能力？と？はまだ秘密です。いえ、考えてないわけではありません

ご意見・ご感想、お待ちしております

第一話 出逢い（前書き）

第一話、始めました。ここからこの物語は始まっていくわけですが、まだまだ原作スタートの何百年も前のお話です。だから、ネギ君たちが出るのは、もっと先になります。

そんなこんなで始まるわけですが、どうぞご覧ください。

第一話 出逢い

——ヨーロッパとある山中——

ピチチチ、と。

小鳥のさえずりによって、俺は意識を取り戻した。

「——ん……あれ？　ここどこだ？」

まわりを見渡してみれば、緑一色。空を見上げれば蒼一色。どうやら、俺は森の中にいるらしい。てか、それぐらいしかわかんないんだけど。

「あーっと……さっきのが夢でなきゃ、ここがネギまの世界ってわけか」

雰囲気的には、元いた世界となんら変わりねえけど。と、そんなことを考えていると、

『ハロハロ、燐。お目覚めはいかが？』

「その声……神様か」

突如、脳内に声が響いた。俺はそれに確信を持って返す。……まあ、はたから見たら、完全に不審者だろうが。

『そうよ。アンタの頭の中に住まわせてもらってるわ』

「ふーん……」

……… っ て、 え！？

「なんか、サラッとんでもないこと言っ たよね？！」

『何よ、うるさいわねー。せっかくの暇つぶしなのに、見ているだけなんてつまらないじゃない。アタシもガンガン口出しするわよ』

「マジかよ……」

正直嫌だが、まあ文句は言えない。

「まあ、それはもういいや。それより、今はいつでここはどこだ？」

『場所は見ての通り、森の中。時期は、15、6世紀ね。魔女狩りの最盛期とも呼ばれているわ。ご要望どおり、エヴァちゃんが焼かれる直前よ。』

「どこで？」

『真正面にある街で』

「あ？」

改めて目を凝らしてみると、なるほど確かに街が見える。へー、あそこでエヴァが焼かれるのか……ん？

「なんか、煙上がってねえ？」

『そりゃそうよ。だから言っただじやない』

「何を？」

俺がそう尋ねると、彼女はあっさりところ言っただ。

『エヴァちゃんが焼かれる直前だっただ』

「直前すぎるわバカ！」

叫んで、慌てて走り出す。

あークソッ！ あの煙は、エヴァを焼くための炎ってことかよ！
生き残ることは知ってても、それじゃこの時代に来た意味ねーだ
ろ！

『がんばれっ、がんばれっ』

「お前ちよつと黙ってろ！」

やばいやばいやばいやばい！ このままじゃゼッテーマにあわね
え！

どうする？！

『てか、能力使えば？』

「だから黙って——あ」

そうだ……俺、チートなオリ主になったんだっただ。
なら——

俺は、能力？である全魔法使用可能の能力を使って、魔法を検索

する。今はとにかく、スピードがいる。だったら——こいつだ！

「戦いの旋律・加速二倍脚！」

原作で、バル……バルなんちゃらが使っていた、身体強化魔法の脚力版だ。これで俺も足が早く……早く……

「あれ！？ なんねえよ！？」

『だって、今のアンタ、魔法発動体持っていないじゃん』

「ごもつともつ！」

それじゃあ……どうしよう！

『あのねえ。魔法だけがアンタのチカラじゃないでしょ？』

「確かに……でも、残りのやつは今使えそうもねえぞ？」

『だったら、組み合わせるなりなんなりしなさい』

組み合わせる……そうか！

俺は山道を駆け下りるのを一旦やめ、一本の木の前に立ち、それから両手を勢いよくあわせる。

そして——

——バシィ！

閃光と音を弾けさせ、俺が両手を押し当てた木から、『木刀が生まれた』。

「すっげ……マジで錬金術使えたら。それに……」

俺は身体が軽くなっているのを感じた。さらに、木刀の最も効率のいい使い方が頭に流れ込んでくる。どうやら、ガンダールヴも正常に機能しているようだ。

「——うっし！」

それを確認した俺は、再び駆け出す。エヴァンジェリンを助けるために。そして——

さっそく原作介入だ！

* * *

S I D E エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

——ヨーロッパ とある街中——

——疲れた、と思った。

逃げ続けることに。耐えることに。なにより……生きることに。私は数百年前、とある領主の下で何不自由ない生活を送っていた。今のような化け物ではなく、人間の少女として、だ。

しかし、私が十歳の誕生日……私の体は、吸血鬼の身体へと変わ

っていた。

怖かった。わけがわからなかった。そしてなにより、私をこんな姿にした者が憎かった。

だから私は、その元凶である男を殺し、城を出た。

それから……大変だった。

吸血鬼は、年をとらない。私は未来永劫、十歳の姿で生き続けなければならぬ。しかし、それを見て人間たちは恐れた。

恐れて……私を追い、迫害し、殺そうとした。だから私は、逃げて、耐えて、生きた。

だが、それでもつい先日……私はついに捕まった。

それはきつと、実力的なことが原因ではない。私が疲れた、それが原因なんだ。

「なのに死ねないとは……神様というやつは、よほど私が嫌いらしい」

私のもとにくべられる薪を見て、私はそう呟く。

捕まった私は、現在街の広場で磔はりつけにされている。これから薪に火をつけて、魔女狩りを行う気なんだろう。

だけど、それでも私は死なない。いや、死ねない。

「それが、どれだけつらいことなのか、貴様らに分かるのか……？」

私の小さな問いかけは、大声で喚いている民衆には届かない。

そしてついに——火がつけられる。

ああ……私はこれからどうなるのだろうか？ この火が雨やなにかで消えるまで、焼かれるのは確実だ。なら、その後は？ また焼かれるのか、それとも首を落とすのか、はたまたどこかの牢屋に永遠に閉じ込められるのだろうか？

う一度跳躍。そうして、一軒の屋根に飛び乗った。
そして――

「よお、お姫様。ケガ、ねえか？」

笑いながら、そう尋ねてきたのだった。

* * *

SIDE 燐

あー、あぶなかった。ギリギリセーフってどこか。

って、恥ず！ とつさに勇者様とかお姫様とか言っちゃまったけど、俺超痛いやつじゃん！？

……いや、待てよ？ 俺、普通に日本語で叫んだよな？ てことは、誰にも聞かれてな――

『アタシがしっかり翻訳してあげたわよ』 魔法使えるようになったら、自分でやりなさい？』

「うん、ありがとう。だけど、なんでだろう。素直に喜べねえよ」

まあ、俺の過失だから神様を責められねえが。つか、神様ってめんどいな。何か仮名を考えておこつ。

ま、それはそれとして、言葉が通じるってことは……。

「あ、ああ。大丈夫だ。なんともない……」

ビンゴ。向こうの言葉も普通に日本語だ。てか、まんまアニメと同じ声だな。

「うしつ。そんなら、さつさと逃げるか。チートって割には、今の俺まだ弱弱だし」

魔法つかえねえとか、一番困る。残りの能力で戦ってもいいが、ここは逃げた方が得策だろ。

なんてことを考えていたら、エヴァがいきなり正気を取り戻して叫んだ。

「って、なんだお前は?! いきなり現れて、なんの目的で私を助ける?!」

「あ? 目的って……襲われてたからとしか」

「襲われてたから? そんな非利己的な理由で私を助けようと言うのか? ふざけるな! 私にそんな偽善を押し付けるのは、やめろ!」

「……………」

ええー、なにこのガキ（ホントは超年上だけど）。なんて面倒な性格してんだ。

やっぱ、この数百年で性格捻じ曲がってんのかなーなんて思いつつ、俺が口を開きかけると――

「それに! ……それに、私は……化け物なんだぞ――ッ!」

「……………」

——その顔が。

自分を化け物だと言ったその顔が、あまりに悲痛に満ちていたのだ。

だから、俺は言っただけだった。

「知るか、んなもん」

「な、はあ！？ 知るか、お前——」

「関係ないね。お前がバケモンだとか、そんな『どうでもいいこと』。俺は綺麗な女の子が火あぶりにされそうになってるのを見た。だから助けた。それだけだ。……それに、見ろよ」

俺が指差すと、そこには俺たちが話してる間にわざわざ取りにいったのか、弓を構えた大勢の市民がいた。それを見たエヴァの顔が、少し歪む。

「こんな小さい女の子と善良な俺に向かって、あんな真似してんだぜ？ 俺には、あいつらの方がよっぽど化け物に見えるけどな」

「……お前……」

エヴァの瞳が見開かれるのを見てから、足に力を溜める。そして——

「だから、俺はお前を助けるんだ！」

バシユシユシユ！

一斉に放たれる矢から逃げるように、俺は広場から離れるために大きく跳躍する。時折当たりそうな弾は木刀で叩き落しながら、俺は屋根の上を転々と飛び跳ねていった。

* * *

——ヨーロッパとある山中——

「——つと。こんなもんだろ」

街を離れた俺は、目覚めた森まで戻ってきていた。だってそこしか知らねえし。

「さてさて。これから、どうすっかな……」

自身の腕の中で眠るエヴァを見やりながら、軽く頭をかく。気付いてたら、いつの間にか寝てたんだ。いろいろあったから、疲れてるんだろ。

『とりあえず、彼女が起きるまで待つてれば？』

「ん……。そだな、そうすっか」

というわけで、エヴァを近くの木によりかからせ、俺も一時身体を休めることにした。ガンダールヴは結構無理やり身体能力を上げるからな。反動でちょっと疲れた。もっとも、神様に運動能力を上げてもらってなければ、もったときつかったんだろうが。

——あ、そうだ。

「そっぴやさ。俺、あんだのことなんて呼べばいいんだ？ 神様つてのじゃ、なんかアレだろ」

『確かにちよつと仰々しいわね。今のアタシたちはある種パートナーみたいなもんだから、もっとフレンドリーに行きましょう。呼び名は燐が決めていいわよ？』

「そか？ んじゃあ……」

うーん、何がいいかな？ 神様に会ったとき一番印象深かったのは、やっぱあの緋色の髪だよな。
そんなら――

「ヒイロ……ってのは？」

『んー、ちよつと男の子っぽい名前の気もするけど、まあいいでしょう。それなら、改めてよろしくね、燐！』

「おう。よろしくな、ヒイロ」

そんなわけで、神様――ヒイロと親交を深めた後、彼女は唐突にこう言った。

『あ、そうそう。アンタの能力の？と？だけどさあ、現時点じゃ使えないから』

「は！？ なんで？」

『あの二つは、ちよつとこの世界では特殊すぎるのよ。それこそ、

不死みたな、イレギュラー。アンタがもつと強くなるなり、この世界にアンタがなじむなりしないと、解禁できないわね』

「マジかよ……。結構、痛いな、それ」

ま、なんとかなるだろ。

——その後。

結局、エヴァがその日に目覚めることはなかった。溜まっていた疲労が一気に噴き出したかのように、泥のように眠り続けた。

俺は一応山狩りの危険性も考慮して、一晩中寝ずの番。ま、とはいってもヒイロと話してたから、退屈ではなかったが。

そして翌日……。彼女は目覚めた。

第一話 出逢い（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております

第二話 心、開く時（前書き）

本日二本目を投稿できました。第二話です。楽しんでもらえる幸いです。

それから、第一話のラストをちょっと書き加えました。

第二話 心、開く時

SIDE エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

——ヨーロッパとある山中——

「う、ん……」

瞼に陽光を感じて、私はゆっくりと瞳を開いていった。
見えるのは、数多の木々。決して、街中などではなかった。

「……………」

私は……どうなったんだ？ 火あぶりにされかけたのは覚えているが、その後助けられて——

「——そうだ！ あの男はどうなった！？」

「ん？ 呼んだ？」

私の叫びには、答えが返って来た。それも、聞き覚えがある。
視線をそちらに向けると、木によりかかりながらこちらを見つめる男が一人。そいつは、間違いなく私を助けた男だった。

「……貴様。これはどういう状況だ」

「どつって……お前が寝ちまったから、俺が見張りをやってたんだよ」

寝てた……？　そういえば、逃げる最中に、気を失った気がする。助けられたという事実には、わずかながらでも気が緩んだのだろう。きっとそれがトリガーになって、疲れが出たんだ。

「……そうか。世話になったな。ではもう、私は行く」

「行くつて、どこに？」

「……貴様には関係ない。助けてもらったのは、感謝しておく。私を否定しなかったことも、正直なところ嬉しかった。だが……いや、だからこそ私にはもう関わるな。私と共にいても、いいことなど一つもない」

どのみち、またこれから、私を殺そうとするものは出てくる。なら、それならばこいつを巻き込みたくはない。仮にも、私を『吸血鬼』^{ケモノ}としてではなく、『私』^{にんげん}として見てくれた男なのだから。私は突き放すように冷たく言つて、この場を去ろうとする。が、それを止めたのは、他でもない男の言葉だった。

「……お前、それ本気で言つてんのか？」

「……どういう意味だ？」

「『自分と関わるな』。その言葉がマジなのかって訊いてんだよ」

「当たり前だ。貴様こそ、何を根拠にそんなことを訊く？」

男は、一度溜息をついて、

「嘘つけ。本当に本気なら、そんな寂しそうな顔するわけねえだろ

うが」

「何……?」

私が……寂しそう?

「お前、ホントは心のどつかで誰かと一緒にいたいって思ってたんじゃないのか? 一人は嫌だって、そう思ってたんじゃないのか?」

「バツ——そんなわけがあるか! 私は吸血鬼だぞ!」

「吸血鬼は孤独を嫌っちゃ悪いのかよ!」

「!?!」

なに……?

困惑に固まる私に、男はさらに言葉を投げかける。

「そうじゃねえだろ! 吸血鬼だろうがなんだろうが、お前は今まで一人で生きてきた、女の子だろうが! だったら、誰かと一緒にいたくなっても全然おかしくないことじゃねえ! 当然のことだ!」

「ふ、ふざけるな! お前に私の何がわかる!? 今まで一人で生きてきた? ああそうさ、お前の言う通りだよ! だから、これからだって一人で生きてやる! どのみち、不死の私と共に生きることが出来る人間なんていやしない! だったらそんなの望んでもしかたない——ハッ!?!」

ま、待て私! 何を口走っている?!
望んでもしかたがないということは——

——『本当は、それを望んでいるということだ』。

「……ほらみる。本音が出てきたじゃねえか」

「ち、違う！ 私は……私は吸血鬼で……」

吸血鬼で……なんだ？

ホントは、あいつが言うとおり、誰かと共に生きたいんじゃないのか？ だから、こんな悪夢みたいな状況から救ってくれと、いもしない勇者にすがったんじゃないのか？

私は……私は……。

——フワリ、と。

気付かぬ内に近寄ってきていた男が、私の頭を撫でた。

「……なんの真似だ」

「ん？ 嘘ばっかついて自分を傷つけてるバカがいるからな。そいつが泣き出しちまわねえように、慰めてる」

「どの……ッ……どい、つだ……そんな……大、馬鹿者は……ッ」

「……さあな……」

静かに、だけどしつかりと。私の頭を撫でる手のひらの感触を確かめながら、私は思う。

いいのだろうか……？　もしかして、私は誰かを欲してもいいのだろうか……？

その答えは――

「うつ……ひつく……えぐつ……あ、あああああああああ
あああ！」

「……………」

――優しくてあったかい、この掌のような気がした。

* * *

SIDE 燐

『あーあ。燐がエヴァちゃん、泣ーかした』

「（うつせ。今シリアスなんだから、余計なチャチャ入れんな）」

泣きじゃくるエヴァをあやしなから、ヒイロに抗議を返す。
それにしても、短くて長い道のりだったな。どんだけ頑固なんだ
よ、こいつ。ま、やっとこさ正直になつてくれたようで何よりだ。
……しかし、あれだな。見た目十歳の金髪美少女が泣いているの
は、絵面的にグッとくるような――

『何考えてるのかなー燐？』

やべ、自重だ俺。

* * *

「どうだ？　ちったあ、落ち着いたか？」

「ああ……。もう大丈夫だ」

数分後、泣き止んだエヴァに問いかけると、しっかりした声が返って来た。多分、吹っ切れたんだろうな。

「そんで？　お前なりに、どんな結論が出た？」

「……私は。きっと本当はお前の言うとおり、さびしかったんだと思う。誰かと一緒にいたいと、ずっと心の片隅で思ってたんだ」

「……………」

「だから……。これからは、私は私を認めてくれる誰かと生きていきたい！」

……よかった。なんとか、原作の孤独至上の悪キャラになるのは防げたらしい。

こんぐらい素直なら、まあ、ここから先の数百年も楽に――

「だから、その……。な。私と、これからの道を歩んでくれないか……？」

……………ん？

あれ……。ちょっと待てよ。なんで顔赤らめてんですか、エヴァさん？　それは、ナギに言うべき言葉では？

『ま、あんだだけ熱く語っちゃね。コロリと落ちちゃうのも、仕方ないかもね』

えー！？ 俺はただ、こいつのこれからが過ごしやすくなるようにしたかっただけなんですけど！？

ま、いつか。どのみち俺も数百年は暇になるわけだし。

「ああ、いいぞ。百年でも二百年でも一緒にいてやるよ」

「いや、さすがにそれは無理だろ」

「んなことねえよ。だって俺、不老だし。寿命じゃ死なねえし」

「ああ、なるほど……って、何いいいいいいいいいいいいいいいいいいい！？」

んだよ、大声出して。

「爆弾発言だろ、それは！ 私はお前が普通の人間の前提で話して
たんだぞ！？」

「あ、そつか。じゃあ、改めて。俺は、黒桐燐。いろいろあつて不老になった」

「ええ！？ このタイミングで自己紹介！？ ……はあ、もういい。お前が不老だというのなら、むしろ喜ぶべきだしな」

驚きはしたものの、俺が簡単には死なないとわかって嬉しいらしい。口元がにやけている。

「なら、私も自己紹介しよう。私は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。既に何度も言っているが、私は吸血鬼だ。それも真祖のな。……まあ、そこら辺の話はいずれお前にも教える」

「わかった」

知ってるけどな。

「……それで、だ。隣、これからどうする？」

「あ？」

これからか……。正直、考えてなかったな。とりあえずこいつを助けることだけ考えてたからな！。

……よし。

「んじゃあ、とりあえず旅してみつか」

「旅……？」

「ああ。世界を見て回るんだ。何かから逃げるためとか、そんなことじゃない。楽しむために、世界中を回る。どうせ、時間はあるんだ。のんびり行こうぜ」

「……ふん。なかなか悪くない提案だな」

「だろ？ つーことで――」

はてさて、これからどうなるだろうか？ それはわかんねえけど、

きつと楽しくなるだろう。なら、俺的には万々歳だ。

あーでも、いろいろやることはあるな。俺のことをエヴァに話さなきゃなんねえし、自分の力を使いこなせるようにしなきゃだし、どうやって原作介入するか考える必要もあるし。

——ま。なにはともあれ。

「——出発だ！」

第二話 心、開く時（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 次回は一気に時間が飛ぶ予定です。

ご意見・ご感想、お待ちしております

第三話 帰郷（前書き）

今回は、話は一気に飛んで十九世紀。隣たちが、日本へ行くお話です。

ちなみに、作中に出てくる武田惣角というのは、ウィキに載っていたものを使用しました。

第三話 帰郷

——南洋の孤島——

——あれから。

エヴァと出会ってから、数百年の時が流れ、現在は19世紀末。この数百年は、本当にいろいろあった。そりゃ、そんだけの年月だ。語りつくせないほど、いろいろあったさ。

旅に出た俺たちは、その後百年をかけて、世界中を旅した。ちなみに、この中には魔法世界もふくまれている。

旅を終えたら今度は、旧世界の南洋の孤島に居を構え、これまた百年ほど自己の研鑽に努めた。そのおかげで俺は魔法やガンダールヴや錬金術をほぼ完璧に使いこなせるようになった。あ、あと能力？もやっとこさ解禁できた。ついでに、エヴァは闇の魔法を開発していた。試しに習ってみたらあっさり出来てしまったので、彼女はひどくおちこんでたっけな。

それから、俺自身のことはいくつか話した。流石に全部が全部つてわけじゃねえけど、能力とかは一応な。後、『とある方法』でヒイ口の紹介も済ませた。

……うん。こんなところかな。メチャクチャ端折ったけど、全部書いてたらキリねえし。

つーことで、回想終了。舞台は、前述した孤島の住宅ってことで、いっちょよろしく。

「誰に何を説明しているのだ、お前は……？」

「気にすんな。ただの状況説明さ」

「いや、だから誰に？」

リビングにあたる部屋でエヴァと二人、くつろいでいる。

あ、いや、『二人』じゃねえな。

「ケケケツ。マア、ナニハトモアレ切ラセロ、燐」

「いや、アンタそれ、そんな軽く言っていていいことじゃないから」

「ああ、ゼロとヒイロか。外で遊んでたんじゃねえのか？」

「やめよ、やめ！ チャチャゼロったら、何かにつけてアタシを切り刻もうとするのよ！？」

「ケケケツ」

うーん、まあなんだかんだでこいつらはずっとこんな感じだし、仲はいいんだろ。

——つと。紹介が遅れたな。

今、ずかずかとリビングに入り込んできたのは、チャチャゼロとヒイロ。ヒイロは知っての通り神様のことだが、今は『実体化』していて、三十センチくらいのサイズになっている。なんでも、俺が魔力を供給することで、こうやって肉体を手に入れることができるらしい。さっき言った『とある方法』ってのもこいつのことだな。

んで、チャチャゼロ。まあ、俺はゼロって呼んでるが、こいつはエヴァの従者の一人（体）だ。エヴァの魔力を糧に動く、魔法人形。身長はだいたい七十センチくらいで、パツと見はなかなか愛らしい……んだけど、主に似たのか知らんが、多少猟奇的な面もある。いい奴ではあるんだけどな。

で、こんな辺鄙なところに住んでると、友達なんぞできるわけがなく、自然と二人は仲良くなっていった。傍目からみても結構いいコンビに見える。

「オイ、ヒイロ。ツベコベ言ワズ、イッペン切ラレテミヨウ」

「は！？　なんでアタシが我がまま言ってるみたいになってるの！？」

「シヨウガネエナ。後デ、トツテオキノ酒ト食イ物ヲ用意シテヤル」

「あれえ！？　アタシ、もしかして馬鹿にされてる！？　そんなこと言われて『はい、どうぞ』なんて切らせるわけないでしょ！」

あつはつは。仲がいいなあ。

「いや、私にはそうは見えないんだが……」

「細かいことは気にすんな。……それより……」

原作開始まで、あと百年ちよいつてところか。よし、ここらで久々に『ノート』でも見てみよう。

俺は、ダンッ！と強く地面を踏みしめる。と、同時に、俺の影から一冊のノートが飛び出してきた。ちなみに、これはそこらへんに生えてた木を練成して作ってみた。

で、これに何が書いてあるかといえば……。

「ふむ。エヴァが日本に渡り、柔術を習う、か……」

そう。これはほかでもない、原作知識が書き連ねられたノートだ。

さすがに数百年も経てば忘れてしまっただろうと思い、転生後まもなく、製作に取り掛かった。

案の定、今の俺はほとんど忘れちゃってるから、正解だったな。

「？ 燐、なんだそれ？」

「お前の観察日記」

「ああ、なるほどってなるかああああああああ！？ お前は一体、何を書いているのだ、何を！？」

「冗談に決まってるんだろ。間に受けるな」

エヴァを軽くあしらいながら、ノートを影に落とす。すると、ノートは床に当たることなく、するりと影に飲まれていった。

柔術かあ。俺も習ってみるか？ どのみち体術は使えたほうがいいし、久しぶりに日本に行ってみるのも悪くない。

ん？ 世界中を回ったのに、日本は行ってないのだったって？

あゝ、あの旅行は、俺的には海外旅行って感じだったからな。知らない間に、日本を候補から外してた。

とまあ、そんなわけで。

「なあ、エヴァ。お前、日本に興味ないか？」

「日本？ まあ、確かに一度行ってみたいとは思うが。いきなり、どうしたんだ？」

「んー、俺が日本出身つてのは言っただろ？ だから、ちょっと懐かしくなってるな。せっかくだから、一度帰ってみようかと。それに、日本がどんなふうになっちゃったのかも、見てみたいしな」

「そういうことなら、私に断る理由はないな。久々に旅行といこうじゃないか」

うん、やっぱ思ったとおり、エヴァは日本が好きそうだな。言い方こそつけないが、明らかに浮かれた様子で自室に向かっていった。旅行の準備に向かったのだろう。

——さて。

「ヒロ、ゼロ。今から日本に行くぞ。お前らも仕度しろ」

「ん？ 日本って……ああ、そゆこと。アタシはいいわよ」

「日本酒ガ楽シミダナ」

よし、こっちの了承も得られた。

そんじゃあ、言ってみるか。懐かしき——

——故郷へ！

* * *

陸路と航路を使い、のんびりと日本へ。

とりあえずは、日本に来た事がないエヴァとゼロのために、日本を漫遊することにした。

十九世紀末の日本と言えば、明治維新があつて、文明開化が始まったところらへんか。うん、文明レベルが上がった時期ってのは結構よかったかもしれない。まあ、教科書でしか見たことないような

時代に訪れるのも、それはそれでよかったかもしれないが。後、せっかくだから、牛なべを食べに行ってみるとしよう。

——で、とりあえず日本に着いた俺たちは、西は九州から、東は北海道まで、日本を渡り歩いていくつもりで、実際その通りにしていった。

そして、日本に来てから二十年ほど経ったある日……俺自身もすっかり忘れていた、そもその目的である人物に出会った。

後に、俺たちの柔術の師匠となる男。エヴァ曰く、チンチクリンのおっさん——

——たけだ そうかく武田惣角に。

* * *

——日本 山形県——

それは、丁度東北のあたりを旅している時のことだった。

「おつ。なんだ、ありゃ？」

俺、エヴァ、ゼロ、それから頭の中に戻ったヒイロ。四人（三人？）でぶらぶらと街中を歩いていると、前方になにやら人だかりが出来ていた。

「ふん。大方、くだらん見世物だろう。私は特に興味がないな」

「まあ、いいじゃねえの。ちょっと見てみようぜ、どうせ急ぐ旅でもねえんだし」

この時点で俺はすでに、柔術のことなどすっかり忘れていた。

「フツ。まったく、子供だな、燐は。こういうのがあるとすぐに――って、おい！？ 私を置いて行くんじゃない！」

「コレジャ、ドツチガガキ力分カンネエナ」

なんかごちゃごちゃ言ってるエヴァはほたっておいて、俺は人垣に近づき、人の間から中を覗きこんでみる。

すると、そこには三人の男に囲まれている、ちびっこい一人のおっさんがいた。この時代になると洋服の人間もかなり見かけるのに、そのおっさんは和服だった。

俺は、近くにいた女性に話しかける。

「あ、すいません。何か、あつたんですか？」

「ん？ あたしもついさつき来たばかりだからよくわからないけど、どうやら喧嘩らしいわよ？」

「喧嘩って……止めなくていいんですか？ どうみてもあの人、不利に見えますけど」

「ああ、大丈夫よ。あの人、家の宿のお客さんただけだね。すっごく強いから」

からからと笑うその女性に礼を言っ、改めておっさんを見てみる。

年はだいたい四十台ってところか？ ひょろいってわけじゃないが、体格がいいわけでもない。ホントに強えのか？

——と、思っていた時期が俺にもありました。

「うっわ、すげえ」

殴り合いにまで発展した喧嘩は、なんとおっさんの勝利。俺（あと、追いついてきたエヴァとゼロ）らが見ている前で、鮮やかに勝利した。

ありやあ、柔術だな。力込めてるようには見えなかったし。興味を持った俺は、そのおっさんに話しかけてみることにした。

「強いな、おっさん」

「ん？ 誰じゃ、お前ら」

「俺あ、黒桐燐。でもって、こっちがエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。長いからエヴァでいいよ。それから、こっちはチャヤゼロ。えーっと……そう、カラクリと思ってくれ」

おっさんは、乱れた着物を直しながら、

「それで？ そのお前らが、わしに何の用じゃ」

「用って何でもねえけどさ。さっきも言ったとおり、強いなと思つてよ。なんか、やってんのかなって興味が湧いたんだ」

「ああ、そういうことか。わしあ、武田惣角。全国を練り歩いて、だいとうりゅうあいきじゅうじゅつ大東流合気柔術ちゅうつちゅうのを広めてまわつちやる」

へえ。やっぱり柔術家か。

……ん？ 柔術……あ。

「（なあ、ヒイロ。もしかして、このオッサンか？ 原作でエヴァに柔術教えてたのは）」

『さあ。でも、そうなんじゃない？ ここはご都合主義とでも思っ
て、いつそのこと習っちゃえば？』

ふむ……。

「なあ、オッサン。あんた確か、近くの宿に泊まってんだよな？
だったら、その間だけでいいから、俺に柔術教えてくんねえ？」

「うん？ わしは構わんが……わしが滞在するのは、あと一週間ぐ
らいじゃぞ？ その程度の修練なら、大したことはできんが」

「いいよ。後は、自分で鍛える」

「そうか？ なら、いいじやろう」

その後宿泊先を聞き、おっさんとは別れた。よし、これで修行フ
ラグが立ったな。

と、エヴァが俺の服の裾を引っ張り、

「おい、なんのつもりだ。お前はもう十分強いだろう。今更柔術な
ど……」

「近接戦闘の技術はどこまでいっても必要さ。雑魚相手ならまあ、
広範囲呪文で潰せばいいが、モノホン相手にゃ、やっぱあって損は
ねえだろ。……っーわけで、お前も習え」

「は！？ 私もだと……っておい！ だから、私を置いてくくなああああああああああ！」

さてさて、そんなじゃま、百年くらいは頑張ってみようかね。

俺は、俺たちが泊まる予定の宿へと向かいながら、影からノートを取り出す。

んー、次は……そうだな――

――『あいつ』がどれくらいのもんか……見てみつか。

第三話 帰郷（後書き）

次回は、またまた話が十分飛びます。

ご意見・ご感想、お待ちしております

第四話 幼きサウザンド・マスター（前書き）

というわけで、サブタイから大体内容がわかってしまいそうな第四話です。どうも、まだまだ原作開始は先のようにです。

第四話 幼きサウザンド・マスター

「さて……と」

旅行の準備を終えて、俺は軽く伸びをした。
そんじゃ……行くとしますか！

* * *

——南洋の孤島——

——さて。

再び時は百年近く流れて、今は1978年。

この百年間は、例によって孤島にある住居で過ごした。もちろんその間は柔術を鍛え上げることも忘れなかった。

言葉どおり一週間で去った武田のおっさん曰く、「筋が反則的にいい」らしい。それが十倍運動神経のおかげか、元からの才能（まあ、こっちはほぼあり得んが）だったのかは知らんが、なかなかのものじゃないか？ と思えるぐらいにはなった。

で、だからだと時は流れて現在。百年前から決めていた予定を行う時が来た。

「というわけで、エヴァ。俺はちよっくら日本に行ってくるから」

「なにが『というわけ』なのかは知らんが、勝手に行って来い！
私は知らん！」

ありやりや……まだ怒ってら。

実は昨日、ちょっとしたことでへそ曲げられたんだよねー。よし、おみやげ買ってきて許してもらおう。扇子でも買つか。

「ゼロは魔力の関係で残るとして……ヒイロはどうする？」

「んー……アタシは今回はパス。ていうか、アンタが日本に言うてる間に、エヴァちゃんはアタシが宥めておいてあげるわ」

「サンキュ。んじゃあ、頼んだ」

「^{おみやげ}燐、酒期待シテルぜ」

「わーった。ゼロも、じゃあな」

二人（どっちも人じゃねえけど）に別れを告げて、家を出る。

今回はどうやって行くかな。普通的手段で行くのは時間かかるから……魔法使うか。

「デイグ・リル フル・ミル カオスフリウス。流れ行く風よ、己が真価によりて、我を彼の地へと運ばん——誘いの疾風」

ブオンツ！

風の精霊を利用した、転移魔法。これは本来なら日本まで飛ぶことは出来ないんだが、京都に補助用の魔方陣を描いていることと、俺の魔力が桁外れなことが合わさって、日本への転移が可能になった。

ちなみに、始動キーと魔法発動体である指輪は、かなり昔に作った。指輪は、エヴァに材料を教えてもらって、それを集めて練成し

た。

とまあ、つーことで――

「来たぜ、日本！」

京都の、とある山中。人が入りこまなそうな場所に設置された、座標指定型遠隔転移補助魔方陣（長いな）の上で、俺は高らかに右手を振り上げた。

……うん、恥ずいから止めよう。

「まあ、いいや。それより、さっさと行くとすつか。えーっと……確か、埼玉だったな」

ちよつと遠いが、杖でのんびり空を飛んでいこう。

「杖よ」

軽く唱えると、例のごとく影から俺の身長よりも高い杖が飛び出してきた。こいつはただの木の杖ではなく、きちんと契約も結んだ発動体にもなる杖だ。

ま、そんなことはどうでもいい。

俺は杖に跨り、宙に颯爽と浮いた。それから魔法で方向を探り、埼玉へと向かって飛行しだした。

「おー、快適快適。こういう空の旅もやっぱ悪くねえなあ」

風の魔法で周囲に障壁を張ることで、風圧を感じない。最高だ。

……ん？ そいういや、俺がどこに向かっているのか、だって？

そいつはな――

——麻帆良学園——

「ここが……麻帆良学園か……」

今、俺はあの麻帆良学園に来ている。もうかなりおぼろげだが、漫画で読んだとおりの街中だ。

「くぅー感激だ！ オラ、なんだかわくわくしてきたぞ！」

という小ボケは置いて。とて。

いやあ、マジですげえな、ここ。学園っていうより、もうほとんど一都市になってやがる。洒落にならないデカさだな。

——っと。まあ、それはともかく。

俺は、学校に似合わない服装（魔法使いまるだしのローブだもん）が原因で、ひどく注目を浴びてしまっている。これはそうそうに用事を済ませたほうがいいな。

俺は、こちらに視線を向ける女生徒に歩み寄り、尋ねる。

「ねえ、キミ。ちょっといいかな？」

「ふえ！？ な、なんでしょうか……？」

？ どうしたんだ？ やけに顔が赤いな。もしかして、体調不良か？（注：隣君は自覚なしの美形です）

「（なるべく早く済ましてあげよう）一つ訊きたいんだけど、この学園の文化祭っていつ？」

「文化祭……ああ、麻帆良祭のことですね。それなら、丁度一ヶ月後の六月二十日にあります」

「ふむ……。じゃあ、まほら武道会はいつかわかる？」

「あれは確か、二日目のはずです。あ、でも、初日の夜に予選があるらしいですけど……」

「そっか。ありがとう、助かったよ」

ちよつと早めに来すぎたな。まあ、どうせだから、この一ヶ月は休息と修行に当てよう。家だと、毎日どたばたしてるから、何もねえってことがないんだよなあ……。

そんなことを考えながら、俺は学園を後にした。

……ちなみに。

俺の後ろ姿を彼女が熱っぽい視線で見てたことに、俺はついぞ気付かなかった。

* * *

——龍宮神社 予選会場——

——一カ月後。——

「——っし。やっと来たか」

六月二十日。

麻帆良祭初日であるその日を、俺は近場のホテルで迎えた。こう
みえて賞金稼ぎとか格闘大会とかで金稼いでたからな。一ヶ月くら
い超ヨユー。

ま、そんなことはおいといて。

原作どおり、技術面では多少劣るとはいえ桁外れなクオリティー
を誇る学園祭を見て周り、現在、俺がいるのはまほら武道会予選会
場。さすがに目玉とかいうだけあって、参加者も観客もとてもな
い数だ。これなら、予選があるのも領ける。

……。
それで今から、俺が参加するC組グループの予選が始まるというわけだが

「おい、兄ちゃん。ケガしねえうちに帰りな」

「子供の喧嘩じゃ済まないぜ」

おーおー、ごちゃごちゃうるせえ連中だ。ちよつと鍛えただけの
一般人がやけに絡んできやがる。うざってえったらありやしねえ。

……ま。とはいえ、こんな連中はどうでもいい。

「……………」

いるいる。一目見て『裏の世界』の住人とわかるやつが結構いる。
確か、原作ではほぼゼロだったが、今は半分くらいは裏の連中だ
な。なるほど、確かに旧世界の大会としては相当なもんだ。さすが
は麻帆良。

——と。

『ガガツ——ピー……それでは、C組のみなさん！ 本戦進出の二
枠を懸けて、予選を開始してください！』

そんなアナウンスが流れた刹那、裏の連中が動き出した！

「ウル・ブス ティアーニス ウォルティネアース——」

「桜間流——」

呪文詠唱。気の開放。

なるほど、未来と違って映像機器が発達してねえから、やりたい
放題ってわけか。

——おもしれえ！

「デイング・リル フル・ミル カオスフリウス！ 古なりし砂の王、
砂塵は狂いて吹き荒れり、乾く御手ゆえ水果を求めん——砂王の宴
！」

迫り来る魔法や気を用いた攻撃をかわしつつ、詠唱を完成させる。
すると同時に、舞台となっていた石畳が砂となりはじめ——

「ほっ！」

俺が虚空瞬動——高速空中移動術——で上空に飛んだ瞬間、C組
の参加者を全員呑み込んだ。

死んじやいねえだろ。一応、手加減したし。

……それにしても、観客やらが驚くのではなく盛り上がっている
のはなぜだろうか？ やっぱ、魔法の認識を緩める結果でも張って
るのかな？

ま、なにはともあれ——

「俺の勝ちだ！」

『いや、あの、予選通過は二人なんですけど……』

ん？ そっぴやそっぴやだっとな……。

「んじゃ……こいつでいいや」

俺は砂の中から一人の男を引っ張り上げ、その場に横たえる。こ
ん中じゃ一番強いっぴいから、こいつを勝ち上がらせよう。

俺はその旨を伝え、興奮冷めやらぬ会場を後にした。

——背後に、『赤髪の少年が予選を突破した』というアナウンス
を聞きながら。

* * *

——龍宮神社 本戦会場——

——翌日。

『会場の皆様、長らくお待たせしました！ ただいまより、まほら
武道会決勝戦を開始します！』

「さって、いよいよメインイベントだな」

早朝七時から始まった本戦も、いよいよ決勝戦。昨日よりも遙か
に多い観客の声援を受けながら、俺は舞台上がる。

え？ 決勝以前の試合はどうしたって？ どうでもいいよそんなの。何百年と研鑽を積んだ俺に、並みの人間が勝てるわけねえだろ。それに……俺が本当に戦いたかったのは、最初から一人だけだったしな。

『それでは、栄えある決勝に進出した選手を紹介いたします！ まずは、リイン・ハイエルト（偽名）選手！ ……えー、参加用紙に堂々と『偽名』と書いているような選手ですが、その実力は折り紙付き！ 予選で他選手を一網打尽にし、七回戦のVS龍弦選手戦では、我々を驚愕の嵐に巻き込んでくれました！』

おい、止めるよその説明。読者の皆さんは七回戦とかしらねーんだよ。

『対するこちらにも、大番狂わせを起こした選手です！ 今大会最少でありながら、予選・本戦共に素晴らしい戦いを見せてくれました！ 僅か十歳の異国の戦士！ その名も——』

アナウンスと共に、ゆつくりと壇上に上がる影が一つ。
燃えるような赤い髪。魔法使い特有のローブ。右手に握られた長大の杖。

——やっとか。さあ、かかってこい。最強の片鱗を見せてみる。

『「（ナギ・スプリングフィールド！）」選手！』

「じゃあっ！ 行くぜ！」

俺の心の声と重なったアナウンスの声に答えるように、ナギが——後に最強の魔法使いとなる少年が吼える。
ガキらしくその容姿はなかなか可愛らしいもんだが……なるほど、

ハンパじゃない魔力容量だな。こいつは確かに、素質の塊みてえな奴だ。

とまあ、そんな感じで分析していると、ナギに話しかけられた。

「なあ、アンタ。アンタ、魔法使いだろ？　それも、洒落にならねえほど強い」

「ああ。戦う前にいってやるが、俺はお前より遥かに強えぞ。今のお前じゃ、百パーセント勝てねえ。それでも、闘るか？」

「ハッ——」

ナギは、一つ笑い、

『それでは、決勝戦——FIGHT!』

「つたりめえだ！」

開始の合図と共に、瞬動でつつこんで来た！

「おりゃ！」

まずは軽く右ストレートを一発放ってくる。とはいえ、この速度をドタマに喰らえば、なかなかのダメージになるだろうが——

——甘え！

「黒桐流——『風車』」

「うおっ!?!」

飛んでくる拳に軽く掌を添え、後ろに受け流す。と同時に、足を軽くひっかけてやれば、簡単に相手は風車のように回りながら吹っ飛ぶ。

武田のおっさんに教えてもらった基礎を元に、俺が作った黒桐流柔術の一つだ。

「なっ、とっ、ほっ！ ……ぶねえ。アンタ、体術もできんのかよ」

「当たり前だ。言っただろうが、俺はお前より強えって。体術だろうが、負ける気はねえ。……もっとも、頭は楽勝で俺の勝ちだろうが」

「（カチン）で、テメエ……！」

ありや？ 軽い挑発のつもりだったんだが、思いのほかキレてら。……ま、いつか。

「馬鹿にしてんじゃねえぞ！」

ボシユシユシユ！

ほっ！ 無詠唱の魔法の矢か。しかもこれだけの数。やるじゃねえか！

俺は右手を前に突き出しながら、

「風楯！」

風の障壁を張り、耐える。なかなか魔力を練りこまれた、いい攻撃だ。

んじゃあ、今度はこっちが見せてやるよ！

「おうりゃあああああああ！」

無詠唱で、影を操り無数の槍と化してナギに向けて奔らせる。
が、それをなんと瞬動と身のこなしだけで回避。全弾、石畳を破壊しただけという結果に終わった。

「舐めんな！ 影の地統ぶる者スカサハの、我が手に授けん、三十の棘持つ愛しき槍を——雷の投擲！」

一転、再びナギのターン。意趣返しのもりなのかしらんが、数十にも及ぶ雷の槍を降らせてくる。
それを瞬動で左右に避けつつも距離をとる。が、それこそがナギの狙いだった。

「こいつで終いだ！ 来れ雷精風の精！ 雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐——」

げっ！？ あの本力、なんて呪文唱えてやがる！？

膨れ上がる魔力を感じながら、俺は焦る。広範囲の大呪文とか、なに考えてんだ！

こうなりや——

「来たれ虚空の雷、なぎ払え——雷の斧！」

「ッ！？」

速さが売りの雷系の上位古代語魔法。
ハイ・エンシェント

形を持つて襲い掛かる稲妻は、ナギの呪文を中断させた。
とはいえ、ナギの切り替えは早い。即座に呪文の行使を諦め、接

近戦を挑んでくる。

ドガガガッ！

拳と拳。脚と脚。ありとあらゆる箇所をぶつけ合いながら、俺たちは近接戦闘インファイトを繰り広げる。

「ああ、クソッ！ めんどい！」

いかげん殴りあうのにも飽きた俺は、虚空瞬動で上空に飛び上がる。

こうなりや、範囲を狭めた大呪文で一気に決めてやる。
——と。

そのとき、ナギが笑った気がした。

「このときを待ってたぜ……解放！」

「なっ！？」

こ、こいつ。さっき俺がキャンセルさせたつものの呪文を、こっそり遅延呪文にしてやがった！

ナギは、杖を左手に持ち直し、右手を振りかぶる。

そして——

「雷の暴風！」

ズガアアアアアアアアアアアアアアア！

——まほら武道会会場の上空に、轟音が響き渡った。

SIDE ナギ・スプリングフィールド

「はあ……はあ……か、勝ったのか……？」

息を整えながら、膝をつく。あいつの前じゃ気丈に振舞ってたけど、実際もう限界だ。今の俺じゃ、まだこの程度の実力しかねえ。だからこそ、勝てたのか不安になる。一目見て感じた、俺とは桁違いの実力。そんなやつがああ程度で倒れるとは、思っていなかった。

そしてその予想は……最悪の形で当たった。

「——ふう。あゝ危なかった。なかなか頭まわるじゃねえか。悪かったな」

「な……っ！」

呪文による粉塵が晴れて、舞空術で滞空し続けているやつが姿を現した。

そんなでもって——

「無傷……だと!？」

おいおい、いくらなんでもそりゃねえだろ! 雷の暴風つつたら、大呪文の一つだぜ!？」

「無傷つつつても、結構危なかったぞ。とつさに『能力』使わなかったら、少しは喰らってたかもな」

「能力……？」

アーティファクト……じゃねえな。何か持ってるようには見えねえし。

「ま、それを今、懇切丁寧に説明してやるつもりはねえよ。重要なのは、俺がまだまだ戦える状態でお前が限界だっつー事実だけだ」

「……………」

悔しいが……その通りだな。

「つーことで、お前、さっさと負けを認める。これ以上粘ることに意味はねえよ」

「……ギブアップはしねえ。自分から負けを認めるのは絶対えやだね。……だから、倒すならアンタが倒せよ」

「……なんともまあ、負けず嫌いというかなんとというか——オーケー。んじゃあ、きっちり一撃で決めてやるよ」

そついうと、そいつは右手を鳴らして、拳を作る。
が、飛び掛ってくる前に、俺が待ったをかけた。

「待てよ！ お前の……お前の本当の名前、教える！」

「あん？」

「偽名なんてふざけたモンじゃなくて、本当の名前教えるって言っ
てんだ！　いつか強くなって、もっぺんリベンジしに行ってやる！」

今勝てないなら、いずれ勝つ。

そんな思いを込めて俺が叫ぶと、そいつはポカンとなって、それ
から急に急に笑い出した。

「くつくく……。お前、マジモンの負けず嫌いだな。……いいぜ。
俺の名は……」

——黒桐燐。

他の連中に聞こえないように配慮したのか、念話を通してその名
が伝わる。

……黒桐燐、か。ぜってー忘れねえぞ、その名前。
そして、その数瞬後——

ドガンッ！

——俺の意識は、闇に落ちた。

* * *

SIDE
燐

『——8、9、10！　ナギ選手・KO！　よって、リイン選手の
優勝ですっ！』

ワアアアアアア!

「……………」

テンカウントと同時に湧き上がった歓声の聞きつつ、俺は数秒目を瞑る。

思い出すのは、雷の暴風が俺を捕らえる、あの一瞬。

「……まさか、使うことになるとは思わなかった。ホントは、今のナギが相手なら、『これ』無しでも無傷でいけると思ったんだが……」

さすがは天才少年。予想以上のモンだった。

——が!

「ま! それでも俺には及ばねえがな!」

わはははは、と俺の高笑いが壇上に響く。

——で。その後、優勝賞金である一千万円を手に入れ、インタビューを求める記者どもを振り払い、俺はさっさと自宅に帰ることにした。

* * *

——南洋の孤島——

——後日。

「こ、このバカモンが！ い、一ヶ月以上も出かけおって！ もう帰ってこないかと思ったじゃないか！」

「いてえ、いてえ！？ ヒイ口も残してんのに、帰らねえわけねえだろ——って、おい！ 殲滅魔法とか唱えようとすんな！」

「うるさあああああああいっ！」

一ヶ月何の連絡も入れなかった俺が、涙目の吸血鬼に追い回されたのは……まあ、ご愛嬌ってことで。

第四話 幼きサウザンド・マスター（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております

第五話 いざ大戦へ（前書き）

今回から、しばらく大分裂戦争の話に入ります。やっぱり、せつかなのでまだ原作に入るのはもったいないかなと思ったので。

第五話 いざ大戦へ

——南洋の孤島——

——1982年。

「そういえば、聞いたか、燐」

「あ？ 何がだよ？」

例によつて、例のごとく、孤島での生活を満喫していると、唐突にエヴァがそんなことを言い出した。娯楽の少ない場所だから、少し興味が出る。

「いや、何。私達には関係ないことだがな。近頃、やけに『魔法使い達の国』が騒がしいようだ。なんでも、大きな戦が始まったとか」

「……………」

「燐？」

「…………いや、なんでもねえ」

そうか……。もう、そんな時期か。

忘れてたわけじゃねえけど、ここにいたら時間の感覚が狂うからな。

「そりゃ、あれだろ。ヘラス帝国とメセンブリーナ連合のぶつかり

合い…… 正真正銘、魔法世界を二分する大戦争」

ムンドゥス・マギクス

「なんだ、知ってたのか。私はあちらの地理はあまり知らんが、そうらしい。確固とした理由があるわけでもないのに、なぜ勃発したのだろうな？」

「……さあね」

ホントは知ってるがな。

「まあ、それはいいだろ、どうでも。戦争なんざ、俺達にや関係ないね」

「そうだな」

……なーんてな。

* * *

SIDE エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

——翌朝。

「んみゅ……おい、隣……おなかが空いたぞ……」

朝、空腹によって目が覚めた私は、寝室がある二階から降りつつ、そう呼びかける。

この家の料理当番はもっぱら隣なので、私がご飯をねだる相手は

基本燐に限られるのだ。たまに、ヒイロが作ってくれることもあるが。

「……………」

階下にたどり着いても返事がなく、私は首をかしげる。
はて？ 燐が寝坊するなどありえんのだが……。

「ん？ なんだ、いたのかチャチャゼロ、ヒイロ。お前たち、燐がどこにいるか知らないか？」

「んー、それは……」

「自分デ確カメテミナ、御主人」

「うん？」

ヒイロが促し、チャチャゼロが差し出してくる紙片を受け取り、
私はそれを覗きこむ。

んー何々……。

『ちよつくら、戦争に参加してきます。何年か帰らないと思うけど、
探さないでください。暇だったら、お金を残していくので、旅行で
もしていてください』

……………。

「……………で？ なんだ、このフザケタ置手紙は？」

「見たとおりでしょ。燐のやつ、魔法世界の大戦に参加してくるん

だつてさ。暇つぶしだと思つから、心配する必要ないんじゃない？」

「ほう……」

あ・の・馬・鹿・モ・ノ・があああああああああああ
あああ！

「まあ、私を置いていきおつたなああああああああああ
あああああ！」

静かなはずの南洋の孤島に、私の怒りがこだました。

* * *

S I D E 燐

——メガロメセンブリア ゲートポート——

——ゾクッ！

「な、なんだ？！ 急に寒気が……」

ま、まあ、気にしないようにしよう……。

それはともかく、俺は今、戦塵流れる魔法世界に来ている。原作
開始まで、あと二十年あまり。自宅でだらだら過ごすよりはいいだ
ろう。

で、なぜエヴァ達を連れてこなかったか？ それは簡単な話で、
エヴァを連れてくると話がどう転がるかわからなかったからだ。な

まじ戦闘力が高すぎるぶん、原作に大きく関わる影響を出してしま
うかもしれない。戦力だけなら、まあいいんだが……。――あ、
ヒイロとゼロを置いてきたのは、単純にエヴァのお守り（聞かれた
ら殺されそうだな）な。

そんなわけで、今俺はここにいるのだった。

「さて……。とりあえず、街のほうに出て、情報を集めようかね――
杖よ！」

影から杖を取り出し、上空に飛び上がる。

それから数十分ほど杖を飛ばし、メガロメセンブリアの夜空（言
い忘れたけど、今、夜な）を飛んでゆく。

そしてゲートポートから大分離れた街中で、俺は調査を開始した
……。んだが、

「なあ、ちょっと。アラルブラ紅き翼の連中が今どこにいるか、わかんねーか？」

「紅き翼？　ちょっと前までは各地の戦場に現れてたらしいけど、
この一週間ぐらいは噂は聞かないねえ。巷じゃ、今はこのメガロメ
センブリアにいるらしいけど」

「そっか……。サンキュな、おっちゃん」

……。とまあ、こんな調子で大した情報は集まらなかった。どうも、
ここにいるらしいことは辛うじてわかったんだが……。

――ん？　待てよ？

「確か、探索魔法に、名前を知ってる人間の魔力を探知する、高等
呪文があつたな。アレを使ってみよう」

俺は一度、手に持った杖を構え、

「ディグ・リル フル・ミル カオスフリウス。我は命じん、大気を渡りし風の精よ。深く長く伸びたる縁を通じて、我と彼の者を繋ぐ架け橋になれ——友系の繰り手」

ピィ……ン

唱え終わると同時、俺の小指から俺（使用者）以外には見えない、不可視の光の糸が伸びる。今頃、もう片方の端は、ナギの小指に巻きついているだろう。赤い糸の友達バージョンみたいなもんだな。

「さつて……感知的に、そう遠くはねえな。時期的にメガロに目をつけたのは、間違いじゃなかったみてえだな」

なんてことを呟きつつ、再び上空へ。

そして俺は、ナギがいると思われる方向に向かって、飛び去っていった。

* * *

——完全なる世界下部組織 本拠地——

ドゴオン！ ズズ……バガアアアアアアンツ！

「おーおー、派手にやってんなあ……」

俺が糸を追って飛行していると、糸の先がとある建物の中に続い

ているのが見えた。

「もしかしてこん中にいんのかな？」なんて思って近づこうとした瞬間、建物の一部が爆発し、倒壊を始めた。が、それだけでは飽き足らず、断続的な爆発と共に、その建物は既に見る影もないほどに破壊されつくしていた。

あんなに突っ込むの、嫌だなあ……。

「……ま、でも？ 戦闘なら、助けて恩を売るのもわるかねえか」

と、瞬時に打算を働かせ、自ら戦場へ突っ込んでいく。崩れた石壁から、中に進入。糸を追いかけて、どんどん飛んでいく。

そして――

「ナギ、見つけ！」

腰まで伸ばした金髪の女性と一緒にいる、ナギを発見した。

「……ん？ あいつ、背後から迫る奴に気付いてねえな」

どうやら、ナギが戦ってる雑魚どもの中に、手練が混じっていたらしい。

はあ、あのバカ。油断しやがって。

「しゃーねえ。――ほっ！」

無詠唱で、魔法の射手を数本、ナギに迫る刺客に飛ばす。
相手としてもそれは予想外だったのか、あっさりぶち当たった。

――さあて、感動の再会と行きますか！

SIDE ナギ・スプリングフィールド

「ぐあああつ!？」

「ッ!？」

突如背後から湧き上がった悲鳴に、俺は即座に振り返る。そこには、俺を狙ったのか、刃を振り上げたポーズで吹っ飛ぶ男がいた。クソッ! ザコばっかだったんで油断した!

……って、待てよ? そういや、誰がこいつをぶっ飛ばしたんだ? 不可解な出来事に俺が捻ると、その答えは真後ろから帰ってきた。

「油断大敵だな、ナギ。なんじゃ、俺に『リベンジ』なんざ、できねえぜ?」

「あア!? ……って、お前!」

そこにいたのは、四年前に俺が負けた、黒桐燐という男だった。って、ちよつと待て!?

「なんで、燐がこんなところにいんだよ?!」

「んー? 細かいこと気にすんなや。ちなみに、俺は気にしない」

「お前の意見なんか聞いてねえよ!」

相変わらず、人をおちよくったような野朗だな。

俺が額に青筋を浮かべていると、隣にいた姫さんがローブの裾を引っ張ってきた。

「ああ？　なんだよ、姫さん」

「こやつは誰じゃ？　主の知り合いか？」

「知り合い……っていやあ、まあそうだけどな。俺もそんなによくしらねえ」

近づいてきた敵を殴りながらそう言うと、同じく敵を殴り飛ばしながら燐が姫さんに挨拶した。

「どーも。あんた、ウェスペルティアの王女様だろ？　俺は、黒桐燐。ま、いっちょよろしく」

「……私が王女と知っていてなお、その態度。なるほど、確かに主の知り合いらしいな」

「は！？　そりやどういうこつた姫さん！」

心外もいいとこだぜ！

「ぎゃーぎゃーやかましいぞ、ナギ。それより……このザコどもの相手、俺にさせてくんねえか？　こういう、デケエ戦闘はやったことねえからさ。どんなもんか試してみてえ」

「ふざけんな！　これは俺の「任せてくれたら、今度また戦ってやるよ」——！　……本当だろうな？」

「ああ。約束は守るぞ」

……………。

「……分かった。じゃあ、お前に任せる。——行くぞ、姫さん」

姫さんを伴って、俺は杖に跨る。そして、出口目指して杖を走らせた。

その道中、姫さんが問う。

「意外じゃな。主のことだから、あやつに任せずに自分でやるかと思っただのじゃが？」

「……俺は、もう一度あいつと戦わなきゃならねんだ。最強の魔法使いなんて呼ばれてっけど、俺はあいつだけには勝てなかった。だから……」

俺は、もう一度……。

「……主がそこまで言うなら、それもよかる。それに、私も十分満足じゃ。後は、主を負かした者の实力を見せてもらおうとする」

「そいつぁ、同感だな」

俺も、久々にあいつの实力を見てみてえ。

失望させんなよ……… 燐！

* * *

SIDE 燐

「さて……、そんじゃあ、大呪文で一氣に決めっか」

とりあえず、数を減らそう。

杖を影の中にしまい、ザコどもの攻撃をかわしながら、詠唱に入る。

「デイグ・リル フル・ミル カオスフリウス！ 契約に従い我に従え、炎の霸王！ 来れ浄化の炎燃え盛る大剣、ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄、罪ありし者を死の塵に——燃える天空！」

瞬間、右手に爆発的なまでの光量を持った熱球が生まれ、俺がそれを突き出すと、極大の閃光が建物内を暴れまわった。

普通のやつなら、これで終いだ。……普通のやつなら、な。

「おーおー、派手にやってくれるじゃない。俺、ちつとヒヤツと来たよ」

「なーにが、『ちつと』よ。メチャクチャ顔引きつってたわよ」

「フン。だから貴様は、いつまでたっても貴様なのだ」

「いや、それ意味わかんないっすよ？」

へえ……。

「今のに耐えたのか、テメエら。他の連中は今のでほぼ潰れたぜ？」

若そうなのに、大した実力だな、おい」

と、これに答えるのは緑の短髪をした十六歳くらいの男。他の連中も大方そのぐらいの年齢に見える。ナギ同様、才能があるのだろうか？

「ああ、違っただよねーそれ。俺たちってさ、ヘラスの族^{うから}なわけ。だから、こんなナリでも、三十年近く生きたかな？」

ヘラス……か。そういや、ヘラス族は長命らしいな。

まあ、それはそれとして、続いて発言したのは、赤髪をポニーテールにした、ヒイロ似の女。

「それに、若いのに云々っていうなら、あなただってそんな感じじゃない？ まさか、あなたもヘラス族なわけ？」

「うんにゃ。俺は単純に不老っただけだよ。これでも、もう五、六百年生きてる」

「それは……人外ということか？」

今度は、巨軀の黒髪の男。

「さあ。どっちでもいいさ。いちおう、ある奴に言わせりゃ、不老であって不死じゃねえから、まだ人間らしいが……正直、自分でも人外と思うよ」

俺がそういうと、最後の一人、中学生くらいの身長で、桃色のツィーテルの娘が言う。

「ま、どっちでもいいのはこっちも一緒っすけどね。そんなことより――」

ズアッ――！

彼女が言葉を切った瞬間、四人から強烈な殺気が溢れる。なるほど、自己紹介は終わったから、殺しあおうってか？

「お望みなら、闘つてやる。が、その前に一個聞かせる。――お前らの組織名は、『コスモエンテレケイア完全なる世界』でいいのか？」

「……それに答える理由、俺らにあるか？」

……やっぱそう来るよな。

「だよな。んじゃあ、もう聞かねえ」

俺は答えながら、影から一振りの日本刀を取り出す。黒刀・『白夜』。俺の相棒の一つだ。

んで、柄を握った瞬間、左手に刻まれたルーンが輝きだす。たまには、神の左手こひだりも使ってやらねえとな。もちろん、魔法も使うが。そんじゃあ――

「行くぞ――ッ！」

* * *

――三十分後。

「デイグ・リル フル・ミル カオスフリウス！ 来れ水精、光の精！ 蒼きうねりを纏いて、輝けき光の下を、突き進め海原の水嵐——水の嵐！」

ゴアアアアアアアアア！

光り輝く水の竜巻が、四人組目掛けて襲いかか来る。圧倒的な水圧と水量を持ったそれが、やつらがいた場所を蹂躪しつくしたその十秒後、そこには——

「……チツ。逃げたか……」

分が悪いと思ったのか、騒ぎを聞きつけた警察の出勤を危惧したのか……。

真相はわかんねえけど、やつらはすっかりこの場から消えていた。結構本気でやってたのに、やつらの実力と、何よりチームワークによつてみすみす逃走を許してしまった。

「なんにせよ……逃げ時を間違えないやつは、強い。面倒な敵が出たもんだ……」

つか、あんなやつらがいたのか。原作には出てなかったから、ちょつと油断してたな。

「ま、何はともあれ俺もここにいるのはまずいな。下手すりゃ、俺が捕まっちゃう——影扉」

影を用いた転移魔法を使い、遙か上空に離脱。眼下では、戦闘が落ち着いたためか、メガロメセンブリアの警察が踏み込んでいくの

が見えた。

さて、これからどうするか……。

「おい」

うーん、やっぱり当初の予定通り紅き翼につくか、それとも……。

「おいって」

ああ、第三勢力になって暴れるつても面白そうだな。でも、その場合、全世界を敵に回すことになるからなあ……。それはさすがに――

「おいって言うてんだろぅがあああああああああ！」

ズガアアンッ！

「ぐはあっ！？」

か、雷の矢……？ 障壁張るの忘れてた……って！

「いきなり何すんだナギコラあッ！」

「うつせー！ 呼んでんのにお前が無視するからだろうが！」

「あアン！？ テメエは、無視されたら魔法撃つか？！」

「喜べ、お前は特別だ！」

「喜ぶわけねえだろうがあああああああ！」

……とまあ、大体わかってもらえるとは思うが、今俺はナギと口喧嘩している。ナギは、王女様——アリカ王女を後ろに乗つけて杖で飛んでいる。てか、いきなり魔法使うとか、俺を何だと思ってんだ？

「ああ、クソ！……んで、何の用だよ？ あいつらなら、俺がもう潰したぞ」

「それは、見てたから分かってら。んなことより、燐、お前ちゃんと約束守れよ」

「なんだ、そのことか……。なんなら、今からやるか？ どっか開けたところで思いつきり相手してやるよ」

あの四人組に逃げられたせいで、ちょっと不完全燃焼気味だからな。

だというのに、あろうことかナギの野朗断りやがった。

「お前、戦闘で魔力も体力も減ってんだろ？。んな状態の燐に勝ったって、嬉しくねえ。それに……」

「？ なんじゃ、主。言いたいことがあるなら、はっきり言わんか」

ああ、なーる。

「その姫さん、連れて帰らなきゃ……ってか？」

「まーな……」

「別に私は構わんぞ。二人の闘いを見てみたい」

「姫さんがよくても、俺がまずいんだよ。このままあんたを連れまわしてたら、まーた詠春の奴に説教されちまう。あいつの説教は、もう耳にタコができるくらい聞いたから、もう聞きたくねー……」

その説教とやらを思い出したのか、ナギは顔をげっそりさせる。

「じゃあ、どうすんだ？ 日にち決めて、そのときになったらどっかで待ち合わせるか」

「いや……それ、多分無理だな。俺達狙われてるし、いつここを抜けるかわかんねえしな……」

イライラ。

「なら、マジでどうすんだよ？」

「うーん……」

頭をかいて悩むナギ。メンドクセエな、こいつ。もう倒してどっか行くか？

密かに小声で呪文を唱えていると、アリカ（もう王女とかいらなくね？）が、

「ならば、こやつも私達の本拠地へ連れて行けばよかる。それならばいつでも戦えるし、私達の手駒も増える。紅き翼のメンバーも納得するじゃろ」

「……そうすつか。んじゃあ、憐。そういうことでいいか？」

「構わねえけど……」

手駒って……。

「じゃあ、さっさと帰ろうぜ！ 夜も明けたことだしな」

「ん……」

その言葉で、俺は東の空が明るくなっていることに気付いた。
この世界でも朝日は東から昇るんだなーなんて思いながら……、

「……うし。んじゃあ、行くか！」

俺は、笑ってそう言った。

* * *

——この、少し後^{のち}に。

魔法世界全土で、いくつかの字^{あざな}が流れるようになる。

曰く、『サウザンド・マスターを超え^{マジックキャンセラー}る男』『兵器に愛されし者』

『万物の変容者』『疑似完全魔法無効化能力者』。

そして——

——『魔王』。

第五話 いざ大戦へ（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております

第六話 ファーストコンタクト（前書き）

今回は、ほとんど原作どおりです

第六話 ファーストコンタクト

——メガロメセンブリア 紅き翼滞在場所——

「……で。貴様は一昼夜中、アリカ王女殿下を連れまわした挙句、その敵本拠地とやらを壊滅させて来たのか！」

「いや、壊滅させたのは隣——」

「黙れ！ そもそも、敵の下部組織を潰しても、意味はないっ！ 何のために秘密裏に調査していると……大体、万が一王女殿下にお怪我でもあつたら、どうする気だ！？」

「姫さん、ノリノリだったぜー？ 楽しかったーとかって」

「嘘つけ！」

——さて。

近くで怒鳴りあっているアホどもは放っておいて、ここらで少しいろいろ説明しようと思う。

まず、ここは俺の元いた世界——『旧世界』——ではなく、魔法使いたちの世界——『魔法世界』——だ。
△ンドゥス・マキクス

そして、今ここでは、大きく分けて北（ヘラス帝国）と南（メセンブリーナ連合）で大きな戦争が起こっている。『完全なる世界』
△スモエンテレケイア
という連中が裏で糸を引いている、大きな戦争だ。
△ラルフラ

で、俺が四年前に叩き潰したナギは、『紅き翼』というパーティーをつくり、南側について暴れまわっていた。

そんな折、ナギたちの元に一人の人物が訪れる。それは、『ウエスペルタティア王国』王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下。北と南の二大勢力に挟まれているウエスペルタティア王国は、長い間その間で翻弄され続けてきた。そこで、アリカ王女はその戦争の調停役となり、終戦を実現させようとした……のだが、それには彼女の力は及ばず、ナギたちを頼りにきた、と。

……ま。大分ざっくり話したが、大体これが今の世情及び状況だ。

んで、今度は俺自身の話。昨夜潰したのは、やはりさっき言った完全なる世界の下部組織だった。ナギとアリカがいるからそうだと思うったんだが、ビンゴだったな。

それはともかく、ナギの言う『紅き翼』の滞在場所に、今俺はいる。結局、宿も何もない俺は、お邪魔させてもらった。とは言っても、着いて早々ナギが説教を喰らい始めたから、まだ自己紹介も済んでねえんだが。

——つと。やっと説教が終わったようだ。んじゃ、話を戻そう。

「——はあ。まあ、証拠を見つけてきたのはよくやった……と言いたいところだが、あの少年は誰なんだ？ まあ、敵ではないんだろうが」

「そりゃ、あいつ自身に聞けよ。俺だってあいつに会ったのは、驚いてんだ」

ん？ どうやら、俺にお鉢が回ってきたようだ。

気付けば、『紅き翼』メンバーが全員こちらを見ている。

「あー……んじゃ、まずは俺の名前は黒桐燐。一応、魔法使いだ」

「黒桐君か……。君は一体、なぜあそこにいたんだい？」

そう尋ねてくるのは、眼鏡をかけた青年。真面目そうな印象を受ける。『ノート』によれば名前は確か……近衛詠春だったか？ いや、結婚してないからまだ青山か。来る前に、『ノート』見といてよかった。

「燐でいいよ。……んで、なんであそこにいたのか、だったな。俺はもともとメガロメセンブリアにいたんだ。それで、夜の空を散歩……っていうか、杖で飛んでてな。そしたら、いきなり近くの建物が爆発して、気になったから進入してみた」

そしたらナギを見つけた、と続けると詠春はうつむと唸った。
ま、ちよつと怪しい感じはあるが、それが嘘だと言う証拠はない。誤魔化せるだろ。

すると、今度は小学生くらいの、活発そうな少年が問う。こいつは……タカミチだったか。

「あ、あのつ。さっきアリカ王女に聞いたんですけど、燐さんがナギさんに勝ったことがあるって本当ですか?!」

「ああん？ そりゃ、ホントかタカミチ？」

答えたのは俺ではなく、銀髪の筋肉ダルマ。こいつは分かる。ジヤック・ラカンだ。前世で俺が好きだったキャラの一人だな。

そんで、それに答えたのは、タカミチではなく白髪のカキだった。こいつは、ゼクトつつつたな。

「うむ。確かに言うつつた。あんなに悔しそうなナギは見たことがないと——」

「だああああああ！ うっせえぞ、お前ら！ そりゃ、四年前の話だ！ 今やったら、俺が勝つ！」

「フフツ……。負けたことは否定しないんですね」

「~~~~~ッ！ アル、テメー！」

ナギが照れ隠しに突っ込んでいったのは、柔らかな笑みを浮かべた黒髪の男。確か、クウネル・サンダース……じゃねえ、アルビレオ・イマだったな。

ってか、今の聞き捨てならねえぞ！

「おい、ナギ！ お前ごときが俺に勝てる気でいんのか！」

「なんだと?! なんなら勝負すつか、コラ！」

「上等だよ。こっちや、まだ昨日の鬱憤晴らせてねえんだよ！」

互いに、勢いよく歩み寄り、視線をぶつからせる。
近くで、詠春が溜息をついた。

「はあ。喧嘩するほど仲がいいとは言いが、ほどほどにしろよ……」

ゴメン、無理。

* * *

ま、結局勝負はしなかった。今夜、ナギが昨日の騒ぎで手に入れ

た証拠（いつの間に？）を持って、この国のお偉いさんに会いに行くんだと。だから、万が一に備えて、万全の状態をキープしたいんだそうだ。

あ、ちなみにアリカはどうか行った。なんでも、帝国（北の連中のボス的な？）の第三皇女とやらに接触しに行ったらしい。一瞬、なんか嫌な予感がしたが、気のせいだなと思い直した。

そして、その日の夜。俺は我がまま言っ、ナギたちについて行くことにした。始めは難色を示されてたんだが、護衛だと言って無理やりついていった。

そして——波乱の夜が幕を開ける。

* * *

——メガロメセンブリア　マクギル元老院議員執務室——

「マクギル元老院議員。ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、並びに三名、到着しました」

「うむ。ご苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

はあ。お偉いさんの部屋ってーから、すげえの想像してたんだが、広いだけでつまんねーな。

最初に発言したタカミチの成長ver.みたいなオッサンは、ガトウ。昼間いなかったのは、いろいろ調査してたからだそうだ。俺のことはもう知っていて、今回の動向も一応承諾している。

んで、次に話したおっさんが、この部屋の主であるマクギル議員。この人が例のお偉いさんらしい。

ちなみに、三名つてのは、ナギ、俺、ラカンのことだ。

「それで、議員……フラトエル法務官はまだ、いらっしやいませんか」

『法務官』というのは、今回の証拠品で発覚した裏切り者を弾劾するための役人だ。そいつがいなきゃ話にならない。

「法務官は……来られぬこととなった」

「……ハ……？」

何言つてんだ、このおっさん？ それじゃ、意味ねーだろ。

「あれから、少し考えたのだがね。せつかくの勝ち戦だ。ここにきて……慌てて水を差すのも、やはりどうかと思つてね」

「……………」

「いや、その……私の意見ではない。そう考えるものも多いということだ。時期が悪い。——時を待つのだ。君達も無念だろうが、今回は手を引いてだな……………」

ムカツクおっさんだな。いつそぶつ飛ばすかと、ナギがおっさんに待ったをかけて——

ボウンッ！

いきなり、おっさんの頭を吹き飛ばした！

これには慌てるガトウ。そして、ラカンも驚いている。
はぁ。お前らな……………。

「よく見てみるよ、おっさん」s。ナギの行動は正しかったようだぜ」

「なっ……！？」

俺達の前で黒煙を上げる炎が、一遍に吹き飛ぶ。そして現れたのは、マクギル議員ではなく、白髪の青年だった。

『ノート』によれば、こいつはフェイト・アーウェルンクス。いや、こいつはただのアーウェルンクスだったか？ ま、どっちでもいいが。うる覚えだから、こいつがここで出てくるのは覚えてなかったが、容姿くらいは書いてあった。ス力してて、白髪の、石田ヴオイスってな。

あ、あとついでに『完全なる世界』の幹部やってる奴だ。

「……その君。何か、失礼なことを考えてないかい？」

「うんにゃ、なんでも」

「……まあ、いいか。それよりも、よくわかったね千の呪文の男。こんな簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ」

研究つてのは……やつが手に持っている棊のことだろうか？ 変身作用でもあんのか？

「ちなみに、本物のマクギル議員なら、今頃メガ口湾の底だよ」

「てめえっ！」

「ゲス野郎がっ！」

ナギとともに叫んで、一気にフェイトに詰め寄る。が、その瞬間、突如として二人の男がフェイトの前に立ちふさがった。

どちらも長髪のおっさんだが、身体を纏うものが違う。片方を炎が、もう片方が水を纏っている。

こいつら……気配を感じなかった。『俺が』だぞ？　なかなかの手練なのは間違いねえ。

「通しませんよ」

「くらえ」

「ッ！？」「」

ドガアアアアアアアアアア！

直後、炎と水が同時に襲ってきた。

んにやるお……舐めた真似してくれるじゃねえか！

「フツ——わ、わしだ！　マクギル議員だ……うむ、反逆者だ！

ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むッ。スプリングフィールド並びに紅き翼のメンバーは帝国のスパイだった！　それから、今から送る画像の男もだ……そうだ、今も狙われている。軍に連絡をッ……！」

あつ、テメー！

「なにやってんだ、コラアッ！」

「……………」

ガキイ！

二人のおっさんはナギたちに任せ、俺は瞬動で白髪野郎に殴りかかる。しかし、それはいなされてしまう。

「君の情報はないけど……『紅き翼』の新人りと見ていいのかな？」

「さあな」

「どちらにせよ、君達は少しやりすぎた。悪いが、退場してもらおう」

ドンッ！

「——チッ！」

フェイトが手をかざすと、そこから石の槍が生まれ、俺を貫こうと飛んできた。慌てて回避した俺は、一度ナギたちのもとへもどる。

「お前ら、とつとと逃げろ！ このままだと軍が出てくるぜ。昨日まで味方だった連中をボコるわけにもいかねえだろ」

「お前らって……燐はどうすんだよ？！」

「俺もすぐ追いつく。……が、そのまえにちょっとあの白髪野郎に灸をすえてやる。あの野郎、こともあるうに俺まで指名手配しやがった！」

ホントは違う用事だが、建前上そうしておく。
が、そんな心情を理解しないナギは、なおも食い下がる。

「けど、お前だけ残すわけにも「じゃあ、アリカはどうすんだよ！」——！」

「お前らが喧嘩売られたんだ。アリカの方にもなんかあった可能性がある。だから、お前はあいつを助けに行け！」

「……だあ、クソ！ 死ぬなよ、憐！」

「ハッ——」

ナギたちが脱出するのを確認しながら、俺は軽く息を吐く。
誰に向かつて、死ぬなんて言っただ。こちら、転生者様だぜ？ 二度も死ぬ気はねえよ。

「いいのかい？ 君が言ったとおり、もうじきここには軍がくる。いかにかの『紅き翼』のメンバーでも厳しいと思うけどね」

「生憎と、結界張ってるからな。ちったあ、持つさ」

これは嘘じゃない。さっきの攻防の間に、この執務室を囲むように結界を張った。たとえ軍といえども、それなりに時間を稼げるだろ。

「いつの間に……。まあ、いいか。それよりも、僕達と闘りあうつもりかい？」

「……うんにゃ。このクラスが三人も相手だと、ちよつと厳しいな。ガチでやりゃ俺が勝つだろうが、今やるつもりはねえよ」

「？ それなら、なんの為に残ったんだい……？」

俺に攻撃を仕掛けようとするおっさん二人を制しながら、フェイトは問う。

その答えは、簡単なものだった。

「『完全なる世界』……いや、テメエらのボス、『造物主』……だっ
たか？ あの野郎は何を求めてんだよ？」

「ッ！ ……なぜ君がその名を？」

原作読みました、とは言えねえな。

「んなこた、どーでもいいんです。で？ おっちゃんに教えてみ？」

「言うと思うかい？」

「だよな……。ま、そう来るのはわかってたから別にいいんだけど
よお」

単純にこいつらの目的をど忘れしたから、訊こうと思って残った
けど……教えてくれねえなら、もういいや。おいおい分かるだろ。

「んじゃ、俺、帰^けーるわ。もう用事もねえしな」

言って、呪文を唱える。影を用いた転移呪文のやつだ。
逃がすまいとおっさん二人が突っ込んでくるが、遅い。

「じゃあな、アーウェルンクス。今度会ったら、そんときや闘^{たたか}ろう
ぜ」

その言葉を最後に、俺の身体は闇に吞まれていった――

* * *

SIDE アーウェルンクス

「……………」

逃げられた……ってことでいいのかな？

軽く嘆息しながら、ついさっきまで『彼』がいた場所を見ると、そこにはすでに誰もいない。

従者が謝ってくるのを流しつつ、少し考えてみる。

『じゃあな、「アーウェルンクス」。今度会ったら、そんなときや闘ろっぜ』

アーウェルンクス……。

「ねえ、僕、名前言っただけ？」

「は？ ……そういえば、言っていましたね。以前、お会いしたことは？」

「あるわけないだろ。だから僕は彼に、『紅き翼』の新メンバーかって訊いたんだ」

本当に……何者なんだ、彼は。

『造物主』の名前を知っているかと思えば……僕の名前まで知っていた。

わからない。彼という存在が、わからない……。
——けど。

「……………」

「どうしました？」

「いや……今度、彼に会うのが少し楽しみになってね」

「？」

僕がこんな感情を持つなんて、ね。

千の呪文の男……彼よりも、興味が出てきた。

『今度会ったら、そんなときや闘ろっぜ』

「いいよ。その時は、存分に闘ろっか」

そう呟いた僕の口元は。

気付かぬうちに、僅かに笑みを作っていた。

第六話 ファーストコンタクト（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7251n/>

魔法先生リンま！～チートですが何か？～

2010年12月8日12時57分発行